

近代日本にとってのエチオピア

——昭和初期における経済的関心とヘルイ使節団来日を中心に——

古川 哲 史

昭和初期における両国間の経済関係の深まり

日本のアジアへの経済的進出において尖兵の役割を担うことになった「からゆきさん」の一部が、インド洋を渡り、東アフリカ沿岸各地やマダガスカル島、南アフリカのケープタウンにまで足をのばすのは明治の中期である。日本人の商人も彼女たちの後を追うように、アフリカに出かけている。1898（明治31）年あるいは99年にケープタウンに赴いて雑貨店を開き、後に「ミカド商会」の名前で貿易商を営んだのは、古^{ふる}谷^や駒^こ平^{まへい}であった。ハワイで事業を成功させることができず、南アフリカに目をつけたのであった。当時、ケープタウンには「からゆきさん」を含む、数名の日本人がすでに在留していた。¹⁾

しかし、アフリカ大陸各地の市場に、日本が積極的に進出するようになるのは、大正期になってからである。エジプトとの貿易関係に始まり、南アフリカ市場では、第一次世界大戦によるドイツの撤退をうけて、日本製品が急速に流入した。そして、英領東アフリカとの関係へと進展してゆく。とりわけ、1920年の戦後不況から1929年の世界大恐慌にいたる時期は、日本の貿易はヨーロッパやアジア市場で伸び悩み、アフリカ市場のさらなる開拓が急務となっていた。第一次世界大戦後、ヨーロッパ諸国の製品がアフリカ市場に復帰するにつれて、競争力の強化が課題となった。

そうした背景のもと、1926（大正15）年3月、国策により大阪商船会社（OSK）が日本と東・南アフリカを結ぶ定期航路「アフリカ東岸線」を開設

2 (古川)

した。1カ月に1回の同定期航路は逓信省命令航路となった。大阪商船は、1908年に始められたブラジル移民船の運航を受け継ぐ形で、1916年に「西航南米線」を設けて、モーリシャス、ダーバン、ケープタウンを寄港地にしていましたが、アフリカ方面の本格的な航路開設は、同社の「アフリカ東岸線」がその嚆矢であった。²⁾1927(昭和2)年に外務省が派遣した東アフリカ経済視察団も、この航路を利用して行き来した。

大阪商船の「アフリカ東岸線」は、神戸から香港、シンガポール、コロンプを經由して、英領東アフリカのモンバサ、ザンジバル、ダルエスサラーム、ポルトガル領ベイラ、ローレンソマルケス、南アフリカ連邦のダーバンを結んでいた。往路は日本の繊維製品(綿布、衣類など)をはじめ、鉄鋼製品(工具、刃物など)、ガラス製品(ビン、器など)、陶磁器などを運び、復路にはおもに東アフリカの綿花を運んだ。ちなみに、アフリカ市場の重要性が高まるとともに、同社は「アフリカ南米貨物線」「アフリカ西岸線」をそれぞれ1935年、37年に開設したのであった。

日本政府は直接航路のないエチオピア(当時はアビシニアとも呼ばれた独立国)とも経済関係を深めるに値すると考えていた。事実、1924年以降、ポートサイド副領事の黒木時太郎などによって、両国間の外交関係樹立の下準備が進められていた。1927(昭和2)年6月、ルーマニア公使の武者小路公共がエチオピアに派遣された。武者小路は黒木を伴い首都アディス・アベバに赴き、そこで外交の実権を握っていた摂政のタファリ・マコンネン(Tafari Makonnen)との間で、日本-エチオピア通商友好条約に調印する。タファリは「エチオピア経済におけるヨーロッパ支配を打ち破るため、新しい、そしてより脅威の少ない貿易相手を探していた。1927年から1928年頃までには、インドと日本、アメリカ合州国に目を向けていた³⁾」といわれる。

1927(昭和2)年9月には、外務省通商局が東アフリカ経済視察団を派遣している。団長は元サンフランシスコ副領事で外務省嘱託の大山卯次郎^{うじろう}で、日本綿糸布綿花同業会の入江^{かなえ}鼎、台湾総督府技師の梅本英太郎などが同行した。この視察団は9月から翌年3月にわたり、ケニア、ウガンダ、タンガ

ニーカ、ザンジバル、ポルトガル領東アフリカ（モザンビーク）、仏領マダガスカル、そしてエチオピアを訪れた。この時の正式な報告書は、大山の執筆による『英領東アフリカ事情』、『アビシニア事情、マダガスカル事情、葡領東アフリカ事情』、入江による『東アフリカ経済事情調査報告書』として外務省通商局から1928年に刊行された⁴⁾。コンゴ盆地条約による「通商の自由」の条例適用⁵⁾をうける英領東アフリカほどではなかったが、エチオピアは日本の経済視察団にとって調査する価値のある市場であった。

昭和期に入ると、日本人のアフリカにたいする地理的知識は増大した。大山の報告書は現地で入手・撮影した写真を掲載している。エチオピアに関して載せられた最初の写真は、女帝ザウディツ・メネリク（Zawditu Menilek）、ついで摂政タファリであった。後者の写真の説明では、「殿下ハ進歩主義ノ政治家ニシテ賢明ナリト称セラル 蓋シ當国第一人」と、数年後には皇帝になり全権を握ることになるタファリの素質を的確に表していた。

大山は「アビシニア事情」を、「位置及面積」「地勢」「歴史」から始め、「外国貿易」「外国トノ政治関係」にいたるまで、本文105ページにわたって報告している。参考にした書物等は記載されていないが、その内容には、当時のヨーロッパ諸国の最新の文献にもとづいて書かれたと思われる詳しさがうかがえる。「外国貿易」ではエチオピア市場における綿布をはじめとする日本製品の存在の大きさと、それら製品の輸入がインド商人の手になることを指摘し、次のようにいう。

「アビシニア」ニハ未ター軒ノ日本商社モナク、日本品ノ売込ハ一ニ是等印度人ノ努力ニ放任セラレ、痒キ所ニ手ノ届カサルカ如キ憾アルハ、我貿易上ノ大欠点ニシテ、大ニ當業者ノ奮起ヲ求メサルヘカラサル所ナリトス⁶⁾

さらに、日本が輸出できるものとして、綿布以外にも、「土人生活ノ向上ト共ニ」、メリヤス、陶器、ガラス器、エナメル器、鉄器、家具類、各種小

4 (古川)

間物などがあることを指摘している。⁷⁾戦前期のエチオピアの貿易実態は、エチオピア政府による正確な経済統計がないこともあり把握が困難な場合が多い。しかし、大山は報告書とは別の文章で、エチオピア市場への日本製品の流入の度合いについて、エチオピアの「1個年間の総輸入額は大凡2千萬円見当であつて、其半額が木綿である。然かも驚くなかれ其訳8割即ち大凡800万円⁸⁾」が日本の紡績会社の製品であると述べている。

報告書の最後「外国トノ政治関係」においては、『『アビシニア』カ英佛伊三国ノ領土ニ依リテ包围セラルル事』を指摘し、エチオピアがそれら各国とのバランスをとりながら独立を維持することに腐心している様が説明されている。

大山は帰国後、上記の報告書とは別に、自身の見聞にもとづいた一般向け書物も著した。それが、『私が見た東アフリカ』(日本移民協会、1928年)や『奇談一東 アフリカ土産』(赤墟閣書房、1930年)である。後者の「はしがき」では「アフリカは世人が不可解だとして居る間に、社会的にも、経済的にも、将又其他の關係に於ても、駁々と進歩して居り……吾等は之を慢然世界の不可解國だとして、済まして居る譯には行かないのである⁹⁾」と述べている。なお、この『奇談一東 アフリカ土産』は、1934年に本文の構成順序を変えただけの内容で『エチオピア探訪報告』(駿南社)として再刊行されている。1934年にイタリアーエチオピア紛争が注目を集め始めるので、そうした時勢にあわせたものであったのだろう。

大山に同行した日本綿糸布綿花同業会の入江鼎は、『東アフリカ経済事情調査報告書』の執筆を担当した。その「結語」には以下のようにある。

今や東阿の新天地は其の開発に伴ひ各国注視の世界的市場たらんとす然るに邦商は従来同地方の事情に疎く恰も暗中摸索の憾なしとせず折角両国接近の橋渡の為に開設せられたる直通航路ありと雖今猶渡航研究者の指を屈するに足らざるものあるは寔に遺憾とする所にして若し現状の儘にて推移せんか我商権の伸暢發展は恐らく百年河清を待つに均しきも

のあるべし翻て我が対支那及対印度貿易関係を見るに今や何れも殆ど行詰の観なきにあらざり此の秋に当り我商権を東阿方面に開拓進展せしむるは割切緊密の事にして従て此の新天地の研究は一日も忽諸に附すべからざる問題たるを失はず……¹⁰⁾

これは現地の視察を踏まえたうえで、東アフリカ市場の日本にとっての重要性を説いた提言であった。とりわけ、日本綿糸布綿花同業会の役員という立場の入江は、日本の繊維製品のアフリカ市場での浸透の度合いを目の当たりにし、日本人による市場開拓、直接貿易の緊急性を痛感したのであろう。

台湾総督府技師の梅本英太郎は医学博士であり、1928年6月に台北で『東部アフリカ、マダガスカル及びアビシニアに於ける衛生状況調査報告書』（台北・盛進商行印刷部）を刊行している。この報告書は、同地へ渡航する日本人向けに書かれたものであった。睡眠病やマラリアなどの疾病と現地の衛生状況を解説し、最後に附録として「熱帯地衛生問答」を載せている。そこでは、「是等の地方に移民を送るとしたら、どんなにすればよいでせうか」という問いがあり、それにたいして、移住者の健康診断を厳密にし、熱帯病についての教養を教え、移住者1000人にたいして医師1人を同行させるべきと記し、「今迄の様に単に人々を海外に送る事のみを考へずに、夫等の移住者の保健といふ事を十分に研究せぬ様では、日本人の海外発展は思ひもよらぬことと考へられます¹¹⁾」と述べている。当時は、エチオピアを含めアフリカ各地への日本人移民の可能性について議論、調査されていた。

エチオピア政権内部では、女帝ザウディツと摂政タファリの間は必ずしもうまくいっていなかった。新旧勢力の権力闘争でもあった。1928年から30年にかけて、権力はタファリの側に傾いていった。1928年には、ザウディツはタファリにネガス (negus, アムハラ語で「王」の意味の称号) を名乗ることを許している。1930年4月にザウディツが病死すると、タファリの正式な皇帝即位は時間の問題となった。日本の外務省は、ザウディツの死去に際して、黒木時太郎を再びエチオピアへ派遣している。そして黒木は、日本政府の哀

6 (古川)

悼の意を伝えるとともに、日本政府にはエチオピアはタファリの政権下で間違いなく安定と繁栄をみるであろうし、タファリの戴冠式には特使を送るべきだと進言していた¹²⁾。日本とエチオピアの両国関係を発展させる絶好の機会と考えたのである。

1930年11月2日、タファリ・マコンネンが皇帝ハイレ・セラシエ1世(Hayla-Sellase I)として即位する戴冠式がアディス・アベバのセント・ジョージ教会でおこなわれた。タファリは内外に自身の権力とエチオピアの近代化の度合いを示すために、彼自身が先頭に立って盛大な儀式を計画した。その結果、各国は「その混乱のない整然とした式典に、自国の民と資源を動員し運営する能力がエチオピア政府には備わっている¹³⁾」ことを認識したのであった。タファリの目論見はかなりの程度達成された。

戴冠式にはヨーロッパ各国が代表を送っており、日本政府もトルコ大使の吉田伊三郎を特使として列席させた。そして、一連の儀式が済んだ11月15日、吉田は外務大臣ヘルイ・ウォルデ＝セラシエ(Heruy Walda-Sellase)と会見し、新たな通商友好条約に調印した。また吉田はアディス・アベバ滞在中、皇帝の命令によるものとしてエチオピア外務省より、日本の憲法をはじめ、歴史や政治、経済に関する英語もしくはフランス語による書物を送るよう依頼されている¹⁴⁾。

このように、日本がエチオピアに経済的関心にくわえ、政治的係わりを築こうと試みる一方で、エチオピア側は明治期以降の日本の急速な近代化の秘訣や方法、現状などを具体的かつ直接的に探りたいという関心が強くなっていった。その結果、エチオピア初の成文憲法「1931年憲法」は大日本帝国憲法をモデルとしたものになり、1931年には外務大臣ヘルイを団長としたエチオピア使節団が日本へ派遣されたのである。

ハイレ・セラシエ1世は近代化を進めるにあたり、憲法の制定を急いだ。皇帝はさしあたりエチオピアを「アフリカの日本」に発展させることを考えていた¹⁵⁾。したがって、皇帝はエチオピアの憲法を、天皇を抱く日本の憲法を参照にして作成させたのであった。憲法の草案は、ロシアで教育を受け、日

本の近代化に賞賛の念をもっていたタクラ=ハワリヤト・タクラ=マリヤム (Takla-Hawaryat Takla-Maryam) が執筆した。そして、皇帝の信任の厚かった外務大臣のヘルイとアドバイザーのカサ・ハイル (Kasa Haylu) によって修正がぐわえられた。そして、皇帝が最終的な承認を与え、1931年7月16日に公布された。この「1931年憲法」は、当時のエチオピアにおける「日本化運動 (Japanization) のもっとも重要な作品であった¹⁶⁾」といわれる。

1932年1月、皇帝も同席した大臣の会議では、ひとりの大臣による次のような発言があった。

諸外国から顧問団を招くよりは、われわれは一国の政府のやり方に従うべきと思われます。われわれは日本政府の運営方針にその手引きを求めべきと、わが皇帝は仰せになられました。憲法を制定したときに日本を規範としたからであります。また、日本は天皇によって支配され、ヨーロッパ諸国と同じような近代化の成果をあげている近年の歴史があるからであります。それゆえ。われわれは日本のように振舞うべきでしょう。¹⁷⁾

エチオピア憲法の勅令の形式をとっている前文は、皇帝が神の意思により選ばれたことを強調し、126代つづいたエチオピア皇室が「万世一系」であることを主張している。君主の意思による欽定憲法であることについても、大日本帝国憲法と同じであった。こうした類似性は多い。一方、エチオピア憲法は大日本帝国憲法と異なる点もあった。ヨーロッパ中世のように、教会に土地の所有権や数々の特権を認めていた。貴族と農民の階級制度も保持したままで、伝統的な教会に依存した教育制度にも改革はあまりみられなかった。信教の自由、言論の自由、集会の自由も規定されなかった。

エチオピアの「1931年憲法」は皇帝を中心に「近代化」を推進させるために制定されたが、その中身がもたらした人々への抑圧は、やがて社会矛盾となって、皇帝ハイレ・セラシエ自身を脅かすことになるのは明らかであった。

日本の場合は1945年の敗戦とアメリカの占領という外圧をきっかけとして新憲法が生まれ、社会改革が進んだ。しかしエチオピアの場合、その皇帝中心の体制が国の内部から崩壊するには、軍部主導による1974年の社会主義革命まで待たねばならなかった。

エチオピア政府の使節団来日 (1931年)

今まで述べてきたように、日本とエチオピアの関係はまずは1920年代に経済的要因を中心に展開した。当時、エチオピアはヨーロッパ植民地主義の脅威にさらされつつも独立を保ち、1923年には国際連盟への加盟を認められている。1927年に日本政府はエチオピアと通商友好条約を調印し、同国への経済的進出の手段が模索された。一方、エチオピア知識人の多くにとって、アジアの「有色人種」国家・日本は近代化のモデルと映ってもいたのである。

1930年にタファリ・マコンネンがハイレ・セラシエ1世として即位すると、その戴冠式に日本政府は在トルコ大使・吉田伊三郎を派遣した。1931年、その答礼としてハイレ・セラシエ皇帝は、外相ヘルイ・ウォルデ＝セラシエを日本に派遣する。ただし、非公式には、「ハイレ・セラシエの最新の計画、すなわち日本をモデルにエチオピアの近代化が可能かどうか¹⁸⁾」をみるためであった。日本政府への借款の可能性も考えられていたといわれる¹⁹⁾。ヘルイを筆頭とする使節団4名は、2カ月ちかく国賓・政府の賓客待遇として日本に滞在することになった。

使節団はヘルイ外相のほか、外交官でジブチ領事のタファリ・マリヤム (Tafari Maruyam) が第一書記官として、外交官のダバ・ビル (Daba Birru) がアムハラ語から英語への通訳として随行した。さらに、皇帝の縁戚にあたるアラヤ・アババ (Araya Ababa) が非公式の身分で日本視察にくわわった。

9月30日、ヘルイの使節団は列車でアディス・アベバを離れ、ジブチへ向かった。10月3日、ジブチ港よりフランス船〈アンドレ・ルボン号〉で日本へ向け出航する。同船はアデン経由でコロomboに10日着、シンガポールには15日に着いた。シンガポールでは一行は日本の領事に迎えられ、シンガポー

ル政庁官の主宰による正餐会などにも招かれる。18日、サイゴンに着き、日本の領事により市内を案内された。香港には25日に到着し、ここで日本の領事から日本でのスケジュールを受け取っている。領事による市内案内のあとは、香港庁官による正餐会に招かれた。上海に29日に着き、日、英、仏の領事から食事の招待をうけ、日本総領事による市内案内があった。11月2日には上海を出航している。3日、海上で日本政府派遣の船に出迎えられ、1927年にエチオピアを訪問してヘルイとも面識のある黒木時太郎が、ヘルイらの船に歓迎員として乗り込み、歓迎プログラムを手渡している。

11月5日、〈アンドレ・ルボン号〉は神戸港に到着した。あいにくの雨の中、ヘルイ一行は兵庫県知事、神戸市長らの歓迎をうけ下船する。「大アーチに沿うて右側に日、エの小国旗を両手にした四百人の青年団員、左側には、神戸市民の大群が整列して居るのが見えた。」「我々一行が第一歩を日本帝国の土につけるや否や歓呼の聲が大群衆から湧き上り小国旗を盛んに振って歓迎してくれた。」「ここからオリエンタル・ホテル迄の沿道はどこもかも大群衆で一ぱいであった²⁰⁾」という様子であった。使節団は、同夜9時発の列車で神戸より東京へ向かった。大阪駅では知事、市長などが歓迎のためプラットフォームに出迎えていたが、30秒だけの停車のため、このときは車中より挨拶するにとどまっている。

翌6日の午前に東京到着。一木宮内大臣、幣原外務大臣、鈴木侍従長などに出迎えられる。軍楽隊の吹奏があり、宮内省の用意した車で帝国ホテルへ入った。

ヘルイ外相の一行は帝国ホテルで小休憩後、宮内省の儀装馬車で宮中へと向かった。「ホテルから二重橋迄の道の両側は大群衆でその人数は到底数えきれぬ程であった²¹⁾」ようである。そして皇居でヘルイは、「陸軍様式大元帥御正装の大日本天皇陛下を拝し奉つた²²⁾」のであった。ヘルイはエチオピア皇帝特使として、アムハラ語で以下の文章を奉読した。両国関係における歴史的な文章なので、全文を引用しておきたい。

陛下！ 今日此日こそは有史以来始めて、我がエ国皇祖シバの女王の後裔より、神武天皇の御後裔たる大日本聖上陛下へ、使節を御送り遊し給ふ。この歴史的最高の名誉と栄ある使命を委ねられたる外臣は、絶大の喜びと幸福とに感泣す。

大日本天皇陛下と我がエチオピア皇帝陛下、即ちこの最も古き両帝国が相近づく事は欣快の至りにして、今や全世界に於て、この両帝国のみ皇統連綿たる万世一系の皇帝によつて統治され居る事を以つて両国民は最大の誇りとなす。

大日本帝国は代々の天皇の御勲により今や世界最高の進歩を示し国民に絶大の幸福と繁栄とをもたらしつゝあり。この事実こそは絶賞に値す。

こゝに於て我がエチオピア皇帝に於かせられては、日本帝国が去る六十年間に目覚ましき大進歩を示せるを、深く感動あらせられ、又日本帝国が斯かる大偉業を斯かる短時日に於て成就せし事を、驚異を以つて御感銘あらせられ、御自身に於かせられても、又全国民にもこの偉大なる大日本帝国を最大の模範として進まん事を御決心遊されたる次第なり。

エチオピア皇帝に於かせられては、昨年戴冠式の際、大日本天皇陛下が長くも特使を御差遣遊され、エチオピア皇室の為、幸福と繁栄とを望し給ひし事を、深く感謝在らせられ、外臣をして、エチオピア皇帝の、大日本天皇陛下に対し奉る如何なる言葉にも表し難き程の、感謝と敬意と尊敬とを伝へ奉る様にとの勅命なり。

陛下！ 外臣は、エチオピア皇帝陛下の御名代として、最初にして、最も栄ある特使として日出づる国の天皇陛下に拝謁を賜はる事は、絶大なる欣びと最高の名誉にして只感泣し奉つるのみ。

この身に余る光栄を賜はるに及び外臣は衷心より、申すも畏き事ながら竹の園生のいや栄へに栄へん事を祈り上げ奉る。

日、エ、両帝国の日毎に深み行く友情は、これ正しく両帝国民の相似たる思想と欣びとによる事は明らかな事実であり、且又将来に於ても日、エ、両帝国のこの美はしき友情の、より強固たらん事を謹みて熱望し奉

る。

エチオピア皇帝陛下に於かせられては、このメツセーチを外臣に、御下命あらせられし際、大日本昭和の聖代の限り無く榮へに榮へて、大なる幸福と繁栄とを幾久しく、日本国民の上に垂れ給はん事を最も御熱心に御衷心より御宿望²³⁾あらせられたり。

奉読が終わるとヘルイは親書を渡し、天皇から握手をうけた。そして、エチオピアの最高勲章であるソロモン大綬章を天皇に捧げ、その後、別の部屋で皇后に紹介された。ヘルイの奉読では、万世一系の統治という両国における「神話」が強調され、エチオピアの発展のモデルとしての日本の近代化が賞賛され、まさに両国関係の友好的発展というエチオピア側の強い期待が象徴されていたといえる。

ヘルイ一行はいったんホテルに戻り、午餐のために再度、宮中へ赴いた。天皇・皇后はじめ皇族、若槻礼次郎首相などが出席する歓迎の宴が開かれている。ヘルイはその席でアラヤを紹介した。その後は一行は上野の科学博物館や動物園を見学し、日本の首都での初日を終えたのであった。

明るる7日は明治神宮、増上寺を訪問した。9日には日光見物へ出かけている。町長などの出迎えをうけ、「四、五百人位の小学生がエチオピアの小旗を振りながら道の両側に整列していた²⁴⁾」のである。金谷ホテルへ投宿後、東照宮など日光を観光する。10日は幣原喜重郎外相の主宰の晩餐会が、若槻首相らも出席して官邸で開かれている。11日は宮内省の招きにより浜離宮での鴨猟を体験した。その後、拓殖大学での歓迎会にのぞみ、永田東京市長らと会っている。12日には東京帝国大学を参観した。13日は軍艦および飛行機の見学のため横須賀へ移動している。途中、川崎で下車して電球工場を訪れてもいた。横須賀では将校らによる案内で、飛行機や軍艦「長門」、「三笠」（日露戦争時の日本海海戦で活躍）を見学した。「非常に有益な一日を終え一行は東京へ戻った²⁵⁾」とヘルイは述べている。14日には、一行は大宮での陸軍大演習を見学している。15日は偕行社での歓迎会に出席した。この歓迎会は日

本新聞社、大道社、政教社などの発起によるもので、200余名が出席した。インドから日本に亡命していたビハリ・ボースの姿もあ²⁶⁾った。

11月16日からは「日本西南部視察」をおこなう。まず箱根を訪れ、17日は名古屋へ移動し、知事や市長の歓迎をうけている。その後、陶器製造所の見学や名古屋商工会議所の晩餐会などに出席した。18日は養鶏場、飛行機製作所、車両製作所、名古屋城などを見学した。19日、名古屋駅から京都へ向かう際には、プラットフォームで満洲出征軍人の見送りに出会っている。京都駅では知事や市長らの歓迎をうけた。20日は京都御所、二条離宮などを見学した。21日は桃山御陵に参拝し、ヘルイは、「エチオピア皇帝陛下御名代として明治大帝の御陵に親しく参拝の光栄を得た事を深く感謝し非常な感激を受けた²⁷⁾」ようである。22日には比叡山を訪れ、その後、映画撮影所を見学する。23日は奈良へ移動し、知事の案内で市内見物をし、春日大社、東大寺(大仏)などを訪問している。24日、大阪へ行き、大阪朝日新聞社を見学した。25日は大阪城見学後、数々の工場を視察し、商工会議所の歓迎会にのぞんだ。27日、大阪から神戸へ赴き、ゴム工場を見学。知事や市長らが出席した神戸商業会議所の歓迎会にも招かれた。いくつかの工場を見学後、兵庫県知事の招待による夕食会に出席している。

28日には宿泊の地である大阪より車で再び神戸へ移動し、神戸より列車で広島を經由して宮島駅へ。そこから宮島へ渡っている。29日、厳島神社参拝後、列車で下関へ向かった。30日、連絡船で九州へ渡り、八幡市の製鉄工場²⁸⁾で兵器製造を見学した後、別府を訪れた。12月1日は別府の温泉地獄めぐりや亀川海軍病院を見学した。2日、別府をフェリーで出航し、神戸港へ向かう。3日、神戸港に着き、車で大阪へ移動した。その後、東京に戻ったのである。

12月7日、ヘルイの一行は東京市長の正賓へ招待された。その後は小学校を参観し、多摩墓地を案内され、貯水池なども見学している。10日、齒科医学校を見学し、解剖室では死体を見る。その後、陸軍省を訪問し、小磯国昭軍務局長よりライフル銃の説明を聞いた。12日には内閣が変わり、ヘルイは

新首相・犬養毅に会いたい旨を申し出て、15日に首相との会見が官邸で実現した。

16日、帝国議会議事堂を訪れた。17日は秩父宮殿下を訪問した。18日、弁護士・角岡^{すみおか}知良^{ともよし}宅に招待される。角岡はアジア主義者として知られ、大道社を主宰し、アジアや有色人種の連帯を説く大日本ツラン同盟の指導者であり、右翼の巨頭といわれた頭山満の顧問弁護士でもあった。そして、これまでエチオピア紹介にたずさわってきていた。エチオピア皇帝の戴冠式などを雑誌などに紹介していたのである。ヘルイ一行は、その角岡の自宅において着物を着て写真撮影をおこない、日本刀を贈られた。その写真では角岡夫人はヘルイから贈られたエチオピアの民族衣装を着ている。ヘルイは角岡を「エチオピアの友」²⁸⁾と呼んだのであった。19日は宮中を拝観し、その後、パリで会って以来の友人フランス領事ビルフォンの招待で、横浜の邸宅を訪問している。

20日は横浜から鎌倉へ移動し、大仏などを見学。21日、左近司中将の訪問をうけ、名刀「三笠」を贈られる。その後、東京茶業組合中央会議所を訪問し、日本最大の社交クラブである交詢社に招かれた。日本キリスト教青年会館(YMCA)も訪問した。皇室へ献上のエチオピア・ライオン(11月27日神戸港着、天覧の後、上野動物園へ)を見に動物園へ出かけてもいる。

22日、午後7時30分の列車で東京駅から神戸へ赴く。翌日、神戸に着き、オリエンタル・ホテルへ入る。28日、神戸港よりフランス汽船〈スフィンクス号〉で帰国の途へついた。なお、角岡の命をうけて、拓務省および東京府の囑託の肩書きで山内正夫と岩淵芳一がエチオピアへ同行した。ヘルイ一行は、上海、香港、サイゴン、シンガポール、コロomboを経由して、1月17日にジブチに着いた。20日、アデイス・アベバに到着した後、宮殿に参上し、皇帝に帰国報告をして使節団の役目を終えたのであった。

以上のようなヘルイ使節団の行動の概要からもわかるように、一行は滞日中、天皇をはじめ首相や外相ら政府閣僚、軍部、企業、社交界の要人らと会見し、首都圏および西日本各地を視察している。日本の新聞や雑誌も、使節

団の行動を頻繁に取り上げた。日本での体験はヘルイにとって、これまでの欧米訪問とは明らかに異質なものであり、感銘をうけることが多かった。したがって、帰国後すぐに、日本体験にもとづいた一書を著している。アムハラ語で書かれたその書物は、*Mahdara Berhan Hagara Japan*と題され、エチオピア暦³⁰⁾1924年にアデイス・アベバで出版された。そのタイトルである「光の源、日本国」に、ヘルイの受けた印象が如実に示されているといえよう。この本は、アムハラ語を解し、日本では英語学者として著名なオレスト・ヴァカーリと、日本人の妻エンコ・ヴァカーリ³¹⁾によって日本語に翻訳され、『大日本』と題されて1934年に出版された。

ヘルイ使節団の来日と各地での精力的な行動は、その後の日本-エチオピア関係の展開に大きく影響することになった。1935-36年の第二次イタリア-エチオピア紛争時の多くの日本人の親エチオピア的態度、対応にそれは明らかである。その一方で、アフリカに「第二の日本」³²⁾が出現することを望まないヨーロッパ列強にとっては、ヘルイの日本礼賛とアジアとアフリカを結ぶ両国関係の進展は、警戒すべき事態と映ったのである。非西洋かつ非白人の国際的「帝国主義勢力」の出現は、アジアの日本だけで十分であった。ヨーロッパに近接するエチオピアが勢力を増し、ヨーロッパ列強の国際政治に影響を及ぼしてくるなどのもつての外であった。

(「ヘルイ使節団」以降の日本-エチオピア関係の詳細および論議については、別稿を準備中である。)

註

- 1) 「南阿渡航者人名一件」(1916年12月), 外務省外交史料, 3/8/8/20
古谷駒平については青木澄夫『アフリカに渡った日本人』(時事通信社, 1993年)に紹介されている。
- 2) 大阪商船三井船舶株式会社編『大阪商船株式会社80年史』(大阪商船三井船舶株式会社, 1966年), 日本経営史研究所編『創業百年史』(大阪商船三井船舶株式会社, 1985年), 日本経営史研究所編『創業百年史資料』(大阪商船三井船舶株式会社, 1985年)など参照。

なお、1926年3月23日、アフリカ東岸線の第1船「かなだ丸」が神戸港を出

航した。同船の船長・森勝衛の豪快な人柄と経歴については、日本海事広報協会編『キャプテン森勝衛——海のもっこす70年』（日本海事広報協会、1975年）に詳しい。森はダーバンで当時まだ19歳のロレンス・ヴァン・デル・ポストと22歳のウィリアム・ブルーマーに会い、彼らの人種差別反対の主張に共感し、日本を知ってもらおうと、2人を「かなだ丸」に乗せて日本に連れてきている。後に親日作家となる2人に森が与えた影響などは両者の後の作品にも言及されている。ヴァン・デル・ポストには森船長の思い出に捧げた『船長のオディッセー』（日本海事広報協会、1987年）もある。

- 3) Harold Marcus, *A History of Ethiopia*, Updated edition, Berkeley: University of California Press, 2002, p.126.

なお、一般にエチオピアの人名には姓がない。自分の名前の後ろに父親の名前をつけ、自分の名前では呼ばれる。たとえば、東京オリンピックのマラソンで優勝したアベベ・ビキラ (Abebe Bikila) は、アベベ選手/氏 (Mr. Abebe) となる。本稿でも以降、エチオピア人の呼び方についてはこの慣習にしたがう。

- 4) 「本邦人ノ海外視察旅行雑件、視察団ノ部、東アフリカ経済及移民状況視察団関係」、外務省外交史料、K210/4/1/1
- 5) コンゴ盆地条約とは1884-85年のベルリン会議で、ヨーロッパ列強がコンゴ盆地を中心に広い範囲で各国の通商の自由や船舶航行の自由、奴隷売買の廃絶などを決めたものである。第一次世界大戦後の1919年に、アフリカに領土をもたないアメリカ、日本などをくわえて、同条約はサン・ジェルマン条約として改正をみた。後に、日本が英領東アフリカなどに進出する際の重要な要因となった。
- 6) 外務省通商局編『アビシニア事情、マダガスカル事情、葡領東アフリカ事情』、外務省通商局、1928年、「『アビシニア』事情」の部、87頁。
- 7) 外務省通商局編『アビシニア事情、マダガスカル事情、葡領東アフリカ事情』、『『アビシニア』事情』の部、87頁。
- 8) 大山卯次郎「黒人帝国——面白いアビシニア」、『改造』1928年9月号、46頁。
- 9) 大山卯次郎『奇談一束 アフリカ土産』、赤壇閣書房、1930年、「はしがき」
- 10) 外務省通商局編『東アフリカ経済事情調査報告書』、外務省通商局、1928年、322-323頁。
- 11) 梅本英太郎『東部アフリカ、マダガスカル及びアビシニアに於ける衛生状況調査報告書』、台北・盛進商行印刷部、1928年、附録の17頁。
- 12) 外務省外交史料、L/1/1/1/3-5
外務省外交史料、A/6/0/0/0/1-28
- 13) Harold Marcus, *Haile Sellassie I: The Formative Years 1892-1936*, Berkeley: University of California Press, 1986, p.114.
- 14) 外務省外交史料、L/3/3/0/8-23

- 15) F. O. 371 / 18032, Burton to Simon, 9 July 1934. (London, Public Record Office)
- 16) Bahru Zewde, "The Concept of Japanization in the Intellectual History of Ethiopia," in Bahru, Chapple, and Hussein eds., *Proceedings of the Fifth Seminar of the Department of History*, Addis Ababa: Addis Ababa University, 1990, p.1.
- 17) Former Ministry of Pen Archives (MP'A, Addis Ababa), MPA 369, minutes, 23.5.24/2.2.32. (cited in Bahru Zewde, *Pioneers of Change in Ethiopia: The Reformist Intellectuals of the Early Twentieth Century*, Addis Ababa: Addis Ababa University Press, 2002, p.111.)
- 18) Anthony Mockler, *Haile Selassie's War: The Italo-Ethiopian Campaign, 1935-1941*, New York: Random House, 1984, p.16.
- 19) 青木澄夫「エチオピア外務大臣の訪日と日エ関係」, 『月刊アフリカ』 37-12 (1997年), 33頁。
- 20) ベラチン・ギエタ・ヘルイ (オレスト・ヴァカーリ英訳, エンコ・ヴァカーリ邦訳) 『大日本』, 英文法通論, 1934年, 16-17頁。
以下, ヘルイの日本での行動については, ヘルイ『大日本』のほか, 当時の『東京日日新聞』『大阪朝日新聞』など主要紙記事も参照した。
- 21) ヘルイ『大日本』, 20頁。
- 22) ヘルイ『大日本』, 20-21頁。
- 23) ヘルイ『大日本』, 21-23頁。
- 24) ヘルイ『大日本』, 38頁。
- 25) ヘルイ『大日本』, 55頁。
- 26) エチオピア問題懇談会編『伊エ問題とエチオピア事情』, 黒龍会出版部, 1935年, 37頁。
- 27) ヘルイ『大日本』, 71頁。
- 28) ヘルイ『大日本』, 91頁。
エチオピア問題懇談会編『伊エ問題とエチオピア事情』, 37-38頁。
なお, 弁護士である角岡はアジア主義者としても著名で, エチオピアについて日本の雑誌などで紹介していた。
- 29) 両者の渡航は, 通商の可能性を調査しつつ, 角岡の提唱する両国間の関係強化が目的であった。とくに当時28歳であった山内正夫は, 角岡の思想的影響をうけて, エチオピアで積極的に活動を続けた。
- 30) エチオピア暦は9月11日を新年とし, 西暦と7-8年の差がある。したがって, ヘルイの帰国日程から判断すると, 原著 *Mahdara Berhan Hagara Japan* (1924EC) は, 西暦1932年に刊行されたことになる。
なお, アムハラ語の原書と日本語の翻訳書には若干の相違がある。日本人にとって常識と思われる地理などの基礎的描写は, 訳者によって翻訳書から省か

れている。また、原書と訳書では挿入されている写真に何点か相違がある。

(筆者が参照した原書はアデイス・アベバ大学エチオピア研究所の図書室所蔵版である。)

- 31) 訳者のオレスト・ヴァカーリとエンコ・ヴァカーリについては、武内博『横浜外人墓地——山手の丘に眠る人々』(山桃舎, 1985年)や、1931年初版刊行以降、日本人の英語学習者に広く読まれ続けてきたオレスト・ヴァカーリ『英文法通論』(丸善, 1967年第44版)の「はしがき」などを参照。
- 32) Mockler, *Haile Selassie's War: The Italo-Ethiopian Campaign, 1935-1941*, p.16.
(本学専任講師 歴史学/比較文化・社会論)